

アジア教育文化ジャーナル

第6巻 2024年3月

原著論文

佐久間良恵

保育士の乳児に対する「抱っこ」の基準に関する意識 1

研究ノート

長沼貴美・宝田慶子・二村文子・片岡優華・浜口恵子・中満麻子・佐藤美香

沐浴体験授業に参加した中学生の対児感情と将来の職業に対する意識の変化 21

中日教育研究学会

Society of Chinese-Japanese Education Research

【研究ノート】

沐浴体験授業に参加した中学生の
対児感情と将来の職業に対する意識の変化

長沼貴美*¹ 宝田慶子*² 二村文子*³ 片岡優華*⁴
浜口恵子*⁵ 中満麻子*⁶ 佐藤美香*⁷

摘要

本研究は、中学生を対象に、モデル人形を使用した「赤ちゃんの沐浴」体験授業の経験を通して、対児感情の変化、経験と気づき、将来の職業に対する意識の変化を明らかにし、将来の職業選択のきっかけとなるキャリア支援の一助にすることを目的とした。

研究対象は、体験授業前後ともに回答が得られた15名とした。対児感情変化では、接近得点は受講後が有意に高く ($p = .007$)、拮抗指数は受講後が有意に低くなっており ($p = .017$)、体験授業により、赤ちゃんを肯定し受容する感情が高まっていた。経験と気づきでは、沐浴の大変さや難しさの経験により、親への感謝が生じ、親準備性にもつながっていた。また、職業選択への意識も変化し、将来への見通しを持っていた。中学生という発達段階において沐浴体験授業を経験し、赤ちゃんに対する肯定的な感情が生じ、将来の職業に対する意識の変化、中学生のキャリア教育に影響をもたらす可能性が示唆された。

キーワード：沐浴、体験授業、対児感情、中学生

1. はじめに

2011年1月31日、中央教育審議会答申において「キャリア教育・職業教育の課題」が提示された。その中で、若者の現状について学校から社会・職業への移

*¹~⁷ 創価大学看護学部

行が円滑に行われていない問題を指摘している（文部科学省中央教育審議会, 2011）。子どもたちが、希望や目標をもって具体的に行動化することで、社会的にも職業選択の上でも自立することにつながると思う。

A 大学では、大学の授業に興味を持ち、学ぶ楽しさを実感する機会とし、中学生を対象に毎年体験授業を実施している。看護学部では、発達段階を通じた連関したキャリア教育支援の一環で実施しており、体験授業によって看護職への理解が深まり、将来職業選択のきっかけになるよう、中学生・高校生と多くの生徒を受け入れ取り組んでいる。前述した答申（文部科学省, 2011）でもキャリア教育について、幼児期から高等教育まで、発達段階に応じ体系的に実施することが示されており、さらに職業教育については実践的な職業教育を充実させることが必要とされている。発達の段階に応じた体系キャリア教育について、中学校では社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等を考えさせ、目標を立て計画的に取り組む態度を育成し、進路の選択・決定に導くとしており（文部科学省, 2011）、連関したキャリア教育支援が重要と考える。

一方、医療従事者の需給に関する検討会である看護職員需給分科会の中間とりまとめによると、今般の看護職員需給推計の位置づけに係る留意事項の中で「令和元年時点で、全ての都道府県においてナースセンターにおける看護職員の求人倍率 1.0 を下回る県が 1 つもなく、足下の看護職員不足の対応は目下、地域を問わない課題である」こと、都道府県による 2025 年における供給推計は、指数平滑法による過去実績(3 カ年)等と対比すると、約 7 万人の差が生じると報告している（厚生労働省看護職員需給分科会, 2019）。

加えて、2017 年 3 月 31 日改定された中学校学習指導要領（文部科学省初等中等教育局, 2017）では、「従来の実践的・体験的な活動の内容を吟味し、仕事の楽しさや完成の喜びを味わわせるなど、充実感や成就感を実感させるとともに、学習内容と将来の職業の選択や生き方との関わりの理解にも触れるなど、生徒の実態に応じた内容や活動を準備し、自ら問題を見いだして課題を設定し解決を図る問題解決的な学習を一層充実させることが重要である。」と実践的・体験的な活動から将来の就業へ繋げる学習について重点を置いている。今回の体験授業に参加した中学生たちは「生まれたばかりの新生児」や「沐浴とは」について講義を受け、さらに DVD で実際の「新生児の沐浴」を視聴して沐浴を実施した。中学生

たちの新生児の理解から実際に沐浴をする過程は積極的であり、他者とも協働して取り組んでいた。

現代の中学生は、核家族化や少子化に連動して、子どもとの接触体験が少ない世代との指摘もある（佐藤,長沼,2019）。そこで、本研究では、体験授業を経験することによる、対児感情の変化、体験授業による経験と気づき、将来の職業に対する意識の変化を明らかにすることを目的とし、中学生に対するキャリア支援の一助とする。

2. 研究方法

2. 1 用語の定義

対児感情

花沢（1992）の乳児に対して大人が抱く感情を肯定的側面と否定的側面の2側面から測定する対児感情評定尺度に示される子どもに対する感情をいう。接近感情とは、愛着的、すなわち児を肯定し受容する方向の感情をいい、接近得点で表す。回避感情とは、児を否定し拒否する方向の感情をいい、回避得点で表す。本研究では赤ちゃんへの感情と定義する。

2. 2 対象者および体験授業の実施日

B中学校に在籍する3年生のうち、看護学部体験授業を希望した15名（男子1名、女子14名）とした。2021年10月に実施し、体験授業時間は90分であった。

2. 3 調査方法および内容

研究デザインは、トライアングレーションデザインを用いた。このデザインの目的は、研究課題を最もよく理解するために「同じトピックに関する異なるが補足的なデータを得ること」（Creswell.J.W.&Plano Clark.V.L, 大谷 順子（訳）, 2010）にある。本研究では、体験授業前後の量的データとして基本属性等の項目、対児感情評定尺度の各尺度得点（花沢,1992）、質的データとして体験授業後アンケートの自由記述内容を用いた。なお、対児感情評定尺度（花沢,1992）は、接近得点と回避得点からなり、回避得点が接近得点に占める割合を拮抗指数で表す。拮抗指数は、個人のうちに接近感情と回避感情とが二次元的に同時に存在す

る事で、両感情が相克することを意味する（花沢,横田,大屋,林,1993）。

2. 3. 1 開始前アンケート内容

- (1) 対象者の背景 5項目：年齢、出生順位、きょうだいの数、赤ちゃんへの関心、赤ちゃんとのふれあい経験
- (2) 体験授業への期待、看護師への志望の 2項目
- (3) 対児感情評定尺度：4件法、28項目（花沢,1992）

2. 3. 2 終了後アンケート内容

- (1) 体験授業への期待、看護師への志望の 2項目
- (2) 対児感情評定尺度：4件法、28項目（花沢,1992）
- (3) 体験授業に関する感想・意見・要望（自由記述）

2. 4 アンケートの手続き

体験授業の前、10分程度の時間を使い、体験授業「赤ちゃんの沐浴にチャレンジしよう！」における研究参加に関する説明書を用いて参加者および引率教員に対して研究の意義、目的、方法、研究成果の公表の可能性、収集するデータの種類、収集方法、期間、所要時間、方法について紙面と口頭で説明した。アンケートは無記名、自由意思によること、アンケートに参加しない場合でも、体験授業には影響しない旨も説明した。また、アンケート記入後は机上のボックスへの自由投函とした。回答に影響の無いよう、教員は別の部屋で待機した。

2. 5 分析方法

基本属性については、年齢、きょうだいの有無など記述統計として算出した。

対児感情評定尺度については、赤ちゃんに対する感情について、接近得点と回避得点および拮抗指数を算出した。Shapiro-Wilkの正規性の検定で確認した結果、正規性が認められなかったため、Wilcoxonの符号付き順位検定を用いて体験授業前後の比較を行った。統計分析にあたっては、SPSS Var.28 for Windowsを使用し、有意水準は5%とした。

体験授業に関する感想については、実際にモデル人形を用いた沐浴と抱っこを

体験し、感想・意見・要望を自由に記述してもらい、文脈を確認しながら、意味のある内容にカテゴリー分類した。分析に関しては、小児看護学・母性看護学の研究者で精査し、信頼性・妥当性の確保に努めた。

2. 6 体験授業の概要

- ・ 体験授業について感染対策を講じながら行うため、受講生を 15 名に制限をした。全学部で開催されている体験授業がある中、看護学部の受講を希望した中学生は看護への志望が高い可能性がある。また興味関心があるとは言えまだ中学生であることから、赤ちゃんに触れることへの可愛さだけでなく、怖さを感じにくくするよう工夫が必要であると考えた。
- ・ A 大学看護学部の講義室にて、教員による授業と「新生児の沐浴」の DVD を 15 分視聴、その後、教員による「沐浴・受け取り・オムツ交換・着替え・抱っこ」のデモンストレーションで手技を確認した。
- ・ 実習室に移動し、3 人 1 組のグループに分かれて演習を行った。①モデル人形の身体を洗う、②沐浴後のモデル人形を受け取り身体を拭く、③オムツ交換と着替えをする、それぞれの役割を決め全員が一連の手技を経験した。2 名の教員がサポートに入り適宜アドバイスをしながら体験授業を進めた。
- ・ 実習室で使用した様々な物品を全員で確認しながら片付けた。

2. 7 倫理的配慮

体験授業の参加者および引率教員に対して、研究および同意書に関する説明を行い、承諾を得られた場合には同意書を得て、アンケートを実施した。本研究は、「創価大学人を対象とする倫理委員会」の承認（承認番号：2022026）を得た。なお、対児感情評定尺度は、出典を明記の上で使用可能であること確認した。

3. 結果

アンケートは、体験授業前後ともに回答が得られた 15 名（回収率 100%）を分析対象とした。

3. 1 対象者の背景

3. 1. 1 属性

年齢は中学3年生であり14歳5名、15歳10名、平均14.7 (SD 0.5) 歳であった。出生順位は、第2子8名 (53.3%)、第1子6名 (40.0%) の順に多く、きょうだいの数は2人が最も多い10名 (66.7%) であった (表1)。

表1. 対象者の属性 n=15

		人数	%
年齢	14歳	5	33.3
	15歳	10	66.7
出生順位	第1子	6	40.0
	第2子	8	53.3
	第3子	1	6.7
きょうだいの数	1人	0	0.0
	2人	10	66.7
	3人	4	26.7
	4人以上	1	6.7

3. 1. 2 赤ちゃんへの関心とふれあい体験

赤ちゃんへの関心は5段階のうち一番高い「大好き」は9人 (60.0%) で一番多かった。「どちらでもない」は2人 (13.3%) で、「あまり好きではない」、「嫌い」はいなかった。赤ちゃんとのふれあい経験は「現在ある」7人、「以前ある」6人と、「全くない」2名であり、86.7%は赤ちゃんとのふれあい経験があった (表2)。

表2. 赤ちゃんへの関心およびふれあい経験 n=15

		人数	%
赤ちゃんへの関心	大好き	9	60.0
	少し好き	4	26.7
	どちらでもない	2	13.3
	あまり好きではない	0	0.0
	嫌い	0	0.0
ふれあい経験	現在ある	7	46.7
	以前ある	6	40.0
	全くない	2	13.3

3. 2 対児感情

対児感情評定尺度について、接近得点の平均点は受講前 28.2 点、受講後 30.9

点であり、受講後の方が有意に高かった ($p = .007$)。回避得点の平均点は、受講前 10.6 点、受講後 8.7 点であり有意差は認められなかった。拮抗指数は、受講前 39.6 点、受講後 27.4 点であり、受講後の方が有意に低かった ($p = .017$) (表 3)。

表3 対児感情尺度の受講前後での比較

		度数	平均値	標準偏差	中央値	最小値	最大値	有意確率	
接近得点	受講前	15	28.2	7.9	31.0	11	37	.007	**
	受講後	15	30.9	6.7	32.0	16	37		
回避得点	受講前	15	10.6	5.4	9.0	4	21	.130	ns
	受講後	15	8.7	5.1	8.0	1	19		
拮抗指数	受講前	15	39.6	19.1	36.4	15	67	.017	*
	受講後	15	27.4	14.0	25.0	6	51		

Wilcoxon の符号付順位検定 *: $P < .05$ **: $P < .01$ ns: 有意差なし

3.3 体験授業への期待

体験授業への期待を受講前後で比較した。受講前の平均得点は 4.7 点、受講後は 5.0 点であり、受講後の方が得点は有意に高かった ($p = .046$) (表 4)。

表4 体験授業への期待

		度数	平均値	標準偏差	中央値	最小値	最大値	有意確率	
体験授業への期待	受講前	15	4.7	0.5	5.0	4	5	.046	*
	受講後	15	5.0	0.0	5.0	5	5		

Wilcoxon の符号付順位検定 *: $P < .05$ **: $P < .01$ ns: 有意差なし

3.4 看護師への志望

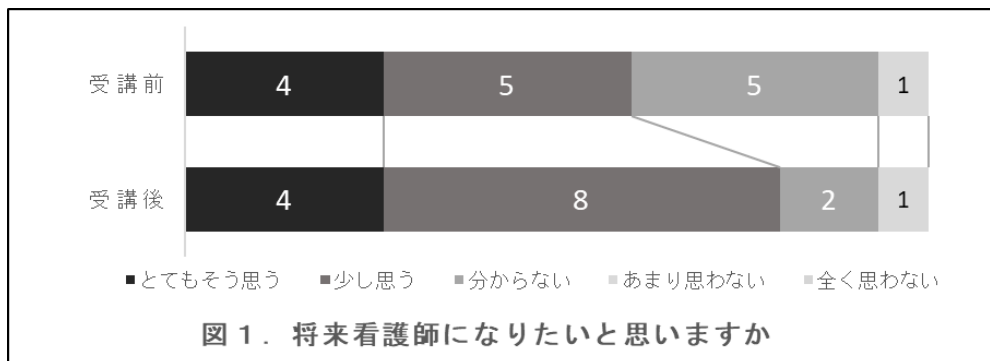
看護師への志望については、受講前の平均得点 3.8 点、受講後は 4.0 点であり、有意差は認められなかった (表 5)。

表5 看護師への志望

		度数	平均値	標準偏差	中央値	最小値	最大値	有意確率	
看護師への志望	受講前	15	3.8	0.9	4.0	2	5	.180	ns
	受講後	15	4.0	0.8	4.0	2	5		

Wilcoxon の符号付順位検定 *: $P < .05$ **: $P < .01$ ns: 有意差なし

看護師への志望では、「とてもそう思う」「少し思う」と回答したのは受講前 9 名（60.0%）受講後には 12 名（80.0%）に増加していた（図 1）。



3. 5 体験授業に関する感想などの自由記述について

15名の自由記述から、赤ちゃんや沐浴に対する感想、意見、要望について、表6にまとめた。6の категорияと17のサブ категория、69のコードが抽出された。以下、 категорияは【 】, サブ категорияは〈 〉、コードは「 」で内容を示す。

表6 体験授業後の感想・意見・要望

категория	サブ категория
沐浴前の不安・緊張	初めての沐浴は不安で緊張した
	初めは赤ちゃんに関わることが怖かった
	看護の仕事に緊張があった
赤ちゃんの印象と実感	赤ちゃんはかわいい
	赤ちゃんは繊細
	赤ちゃんは重い
実際の沐浴を想定	本物の赤ちゃんは大変そう
	沐浴は準備や気をつけることが多い
難しくも楽しかった体験授業	沐浴は難しいところがあった
	体験授業は楽しかった
有意義な体験授業	貴重な学びができた
	グループで協力できた
	やさしくサポートしてもらった
体験授業後の気付きと将来への見通し	家族が大切に育ててくれたと感じた
	赤ちゃんへの思いの変化に驚いた
	将来赤ちゃんとの関わりを楽しみたい
	医療職への関心が高まった

3. 5. 1 沐浴体験前

(1) 【沐浴前の不安・緊張】

このカテゴリーは、3つのサブカテゴリー〈初めての沐浴は不安で緊張した〉〈初めは赤ちゃんと関わるのが怖かった〉〈看護の仕事に緊張があった〉で構成された。

〈初めての沐浴は不安で緊張した〉では、「沐浴は初めてで緊張した」「初めて沐浴するため不安だった」と初めて沐浴することが緊張し、不安だったことが述べられていた。

〈初めは赤ちゃんと関わるのが怖かった〉では、「赤ちゃんと関わるのがなく、初めは少し怖いとっていた」と赤ちゃんと関わる経験がないことから、少し怖いと感じていた。

〈看護の仕事に緊張があった〉では、「看護の仕事に先入観と緊張があった」と、看護師の仕事に対して先入観や緊張があったと率直な思いが述べられていた。

3. 5. 2 沐浴体験後

(1) 【赤ちゃんの印象と実感】

このカテゴリーは、3つのサブカテゴリー〈赤ちゃんはかわいい〉〈赤ちゃんは繊細〉〈赤ちゃんは重い〉で構成された。

〈赤ちゃんはかわいい〉では、「赤ちゃんはふわふわしてかわいい」「赤ちゃんはかわいくてあたたかい」「赤ちゃんをずっと抱っこしてたいくらいかわかった」と感じ、「赤ちゃんのお人形にとっても愛着が湧いた」「赤ちゃんの愛おしさを知ることができた」ことが述べられていた。

〈赤ちゃんは繊細〉では、「赤ちゃんはすごく繊細」と赤ちゃんの繊細さを感じ、「首が座っておらず、もろくすぐ壊れてしまいそうで怖かった」との感想を抱いていた。

〈赤ちゃんは重い〉では、「赤ちゃんは意外と重い」「赤ちゃんが重くて大変だった」と沐浴を体験することで、赤ちゃんが意外と重く、大変だったことが述べられていた。

(2) 【実際の沐浴を想定】

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリー〈本物の赤ちゃんは大変そう〉〈沐浴は準備や気を付けることが多い〉で構成された。

〈本物の赤ちゃんは大変そう〉では、「実際の赤ちゃんは動いたり泣いたりするから難しそう」「沐浴を1人でやるとどうなるんだろう」と、本物の赤ちゃんを沐浴することをイメージしていた。

〈沐浴は準備や気を付けることが多い〉では、「沐浴前には確認と準備が必要と思った」と沐浴前の確認と準備の必要性を理解し、「準備不足で慌てるのは危ない」と準備不足に対する危険性まで想像できていた。また、「赤ちゃんは気をつけないといけないことが多く大変だった」と感想を述べていた。

(3) 【難しくも楽しかった体験授業】

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリー〈沐浴は難しいところがあった〉〈体験授業は楽しかった〉で構成された。

〈沐浴は難しいところがあった〉では、「動画で手順を見ても緊張してどうしたらいいか分からなくなった」と沐浴を行う時に戸惑ったことや、「沐浴時、赤ちゃんの体重を持ち続けるのがしんどかった」「服を脱がせたり着せたりするのが難しかった」「5分以内で終わらせるのが難しかった」と、想像以上に重かった赤ちゃんを片手で支えながら沐浴することや衣服の着脱、短時間で終わらせることの難しさが具体的に記述されていた。

〈体験授業は楽しかった〉では、「難しいことも多かったが、それ以上に楽しかった」「楽しく勉強になる授業だった」「体験できて楽しかった」と10名の生徒から述べられていた。

(4) 【有意義な体験授業】

このカテゴリーは、3つのサブカテゴリー〈貴重な学びができた〉〈グループで協力できた〉〈やさしくサポートしてもらった〉で構成された。

〈貴重な学びができた〉では、「赤ちゃんの人形とふれあうのは貴重な体験」「未熟児の赤ちゃんも抱っこできて嬉しかった」と、モデル人形とふれあうことや未熟児のモデル人形を抱っこできたことを、貴重な体験と捉えていた。また、「動画だけではなく体験によって、目と体で学ぶことができた」「沐浴を行ったことはあったが、正しい方法で行えて良かった」と、動画だけでなく実際に体験することで、学びが得られたことや、正しい方法を学べたことが挙げられていた。

〈グループで協力できた〉では、「3人組で行ったため、分からないこともすぐ友達や先生方にヘルプでき、すごく分かりやすかった」「グループで協力や分担するのがためになった」と、グループ毎に実施することで分からないことを聞くことができ、協力・分担することも学びになったと記述されていた。

〈やさしくサポートしてもらった〉では、「先生のアドバイスのおかげで楽しく上手に沐浴できた」「先生や学生が優しくあたたかくて、楽しく学べた」と、教員のアドバイスによって上手に沐浴できたと感じており、優しくあたたかい雰囲気によって楽しく学べたことが語られていた。

(5) 【体験授業後の気づきと将来への見通し】

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリー〈家族が大切に育ててくれたと感じた〉〈赤ちゃんへの思いの変化に驚いた〉〈将来赤ちゃんと関わりたい〉〈医療職への関心が高まった〉で構成された。

〈家族が大切に育ててくれたと感じた〉では、「お母さんや家族が自分を苦労して大切に育ててくれた」「育ててくれたお母さんやお父さんに感謝」と、家族が苦労して大切に育ててくれたことを感じ、感謝の思いを述べていた。

〈赤ちゃんへの思いの変化に驚いた〉では、「体験前後で赤ちゃんへの思いが変わりびっくりした」と、沐浴前後で、自身の赤ちゃんに対する思いの変化を実感していた。

〈将来赤ちゃんと触れ合う時は楽しみたい〉では、「将来本物の赤ちゃんを沐浴する時があるかもしれない」「将来本物の赤ちゃんを沐浴する時は安心して楽しく行いたい」と、将来本物の赤ちゃんを沐浴することを想像し、その時は楽しく行いたいとの期待が語られていた。

〈医療職への関心が高まった〉では、「看護師の仕事は大変そうだけどやりがいがある」と看護師の仕事に対する感じ方が変わっていた。そして、「点滴交換や注射をしてみたい」「看護師になるために何が重要か教えて欲しい」「発達段階の異なる子どもへの関わりにも挑戦してみたかった」と、点滴交換や注射など沐浴以外の看護ケアや看護師になるために必要なこと、また発達段階の異なる子どもへの関わりにも関心を寄せていた。また、「夢がはっきりと決まっていけないので、看護学部にも入ってみたい」と看護学部への進学に興味を持ったり、「看護師になりたいが専門は決まっておらず、小児看護師から学ぶことができ嬉しい」「赤ちゃん

に關係する医療系の仕事に就きたいため、今日のことを忘れず頑張る」と、小児看護学の教員から学ぶことができたことに喜びを感じ、将来の仕事に就くまで今日の学びを忘れないという決意が記載されていた。

4. 考察

4. 1 対象の背景について

赤ちゃんへの関心は大好き、少し好きが合わせて13人(86.7%)であり、どちらでもないが2名(13.3%)いるものの、赤ちゃんへの関心が高い集団であった。また、赤ちゃんとのふれあいは、「以前ある」と「現在ある」とを合わせると13人(86.7%)も経験があると答えており、対象者全員にきょうだいがあり、出生順位も第1子、第2子が多いため、下のきょうだいの世話をしていた経験があるのではないかと推察できる。体験授業への期待は平均4.7点と期待が高い状態で体験授業を受講していた。

4. 2 対児感情の変化

本研究では、対児感情の接近得点の平均点は受講前(28.2点)と比較して、受講後(30.9点)の方が有意に高くなり、回避得点は、受講前10.6点と比較して、受講後8.7点であり、有意差は認められなかったが低下した。さらに、拮抗指数については、受講前39.6点と比較して、受講後27.4点は有意に低下していた。花沢(1992)の中学生を対象に対児感情尺度を用いた調査において、接近得点は、女子21.5点、男子15.6点であった。回避得点は女子9.6点、男子13.1点であり、接近得点については受講前は本研究の対象者の方が高く、回避得点は同等であった。また、小児看護学実習経験後の看護学生を対象とした研究(佐藤,長沼,2019)では、接近得点25.9点、回避得点10.3点であり、受講前の接近得点は本研究の対象者の方が高く、回避得点は同等であった。このことから、対児感情の接近得点が高い集団ではあったが、受講後には有意に接近得点が上昇し、拮抗指数も有意に低下したことから、体験授業を受講することにより、さらに、赤ちゃんを肯定し受容する感情が高まったことが明らかとなった。受講後に接近得点が増えた要因としては以下の点が考えられる。本研究の対象者は、前述の通り、赤ちゃんへの関心が高い集団であった。しかし、関心

はあるものの、〈初めての沐浴は不安で緊張した〉〈初めは赤ちゃんに関わることが怖かった〉と、受講前には【沐浴前の不安・緊張】を抱いていた。一方、受講後の自由記述では、〈赤ちゃんはかわいい〉〈赤ちゃんは繊細〉〈赤ちゃんは重い〉など、【赤ちゃんの印象と実感】に変化していった。本研究では、モデル人形を用いた沐浴体験ではあったが、事前に DVD による実際の赤ちゃんの沐浴の場면을視聴することで、未知だった「赤ちゃん」という存在をかわいい、壊れてしまいそうで繊細、意外と重いなど、実際の赤ちゃんを想像しながら沐浴体験をすることができていた。ゆえに、赤ちゃんに対して抱いていた不安や緊張がほぐれて、モデル人形を本物の赤ちゃんのように実感できたことで、有意に得点が上昇したのではないかと考えられる。花沢(1992)は、未婚女性と既婚の母親との間には、対児感情得点にかなりの相違がみられ、同じ 20 歳代であっても、母親になることによって、対児感情は愛着的方向に発達することを明らかにした。このことから、赤ちゃんとふれあったり、育児をする経験が対児感情に影響することが考えられる。今回、中学生がモデル人形の沐浴体験をすることで、赤ちゃんを肯定し受容する感情、愛着的方向に高まることが確認できた。

4. 3 体験授業による経験と気づき

本研究の対象者は、現在と過去を併せて 86.7%が赤ちゃんとのふれあいを経験していたが、〈初めての沐浴は不安で緊張した〉、〈初めは赤ちゃんに関わることが怖かった〉など、【沐浴前の不安・緊張】を抱いていた。しかし、沐浴の体験授業を通し、〈沐浴は難しいところがあった〉と感じながらも、10名が、それ以上に〈体験授業は楽しかった〉と【難しくも楽しかった体験授業】と捉えていた。

沐浴を行ったことで、〈赤ちゃんは重い〉ことや、〈赤ちゃんは繊細〉だと実感したことと、さらに本物の赤ちゃんをイメージしながら、動いたり泣いたりするため〈本物の赤ちゃんは大変そう〉だと捉えられていた。また、体験授業での経験から、〈沐浴は準備や気をつけることが多い〉と考えられていた。これらのことから、モデル人形や DVD の赤ちゃんの様子、教員のアドバイスを通して、本物の赤ちゃん像を捉え、より安全に沐浴ができるように沐浴の経験を統合して、【実際の沐浴を想定】できたのではないかと考えられた。さらに、抱っこや沐浴を実施したモデル人形を、「赤ちゃんはふわふわしてかわいい」「赤ちゃんはかわい

くてあたたかい」など、【赤ちゃんはかわいい】と感じていたことから、より本物の赤ちゃんへの愛おしさが湧いたのではないかと考えられる。

このような経験を重ねたことで、【有意義な体験授業】と捉えていた。この背景には、赤ちゃんとのふれあいの経験が少ない対象者にとって、沐浴の体験自体が貴重であっただけでなく、〈グループで協力できた〉〈やさしくサポートしてもらった〉ことで、より有意義な経験になったと考えられる。本研究と類似する試みとして、平（2007）は、中学生を対象に、生命の大切さに関する性教育を行い、その後に育児疑似体験（沐浴、衣類の着脱、おむつ交換等）を2～3人グループで行った。この学習効果として、女子中学生の育児意欲得点が体験前より体験後に高くなり、育児意欲が向上したことを明らかにしている。育児意欲が向上した背景として、講義後に新生児人形をお風呂に入れたり、着替えさせたり、おむつを交換したり、抱いたり育児技術を看護学生の個別指導のもとで体験し、自分もできるという自信が芽生え、育児イメージは現実的なものとなったことを述べている。本研究でも、沐浴の講義、グループによる沐浴の実施、教員によるサポートなど受けることで【実際の沐浴を想定】でき、【難しくも楽しかった体験授業】【有意義な体験授業】の経験となったことが考えられた。また、体験授業への期待についても、受講後に有意に上昇し、全員が満点を記載していたことから、有意義な経験となったことが確認できた。

さらに、体験授業での沐浴の経験を通し【体験授業後の気づきと将来への見通し】につながった。赤ちゃんを「お風呂に入れる」等の育児技術の経験は、「子どもや育児に対する肯定的な感情」「子どもへの関わりに対する自己効力感」「親になると自覚している」ことに有意に関連している（小笠原,高田,2021）。このことから、今回の体験授業で行った沐浴という「育児技術の経験」は、育児経験が少ない現代の中学生にとって重要な機会となり、「子どもや育児に対する肯定的な感情」「子どもへの関わりに対する自己効力感」のみならず、「親になると自覚している」親準備性に影響する可能性があることも示唆された。中・高校生や青年期の親性準備性の育成にはふれあい育児体験が肯定的に影響をしていることも確認されている（伊藤,2003;佐々木,末原,2009）。本研究でも、沐浴という経験により〈赤ちゃんへの思いの変化に驚いた〉〈将来赤ちゃんとのかかわりを楽しみたい〉という赤ちゃんに対する肯定的な感情の変化や、〈家族が大切に育ててくれた

と感じた」と、親への感謝の気持ちが生じていた。八幡、島谷（2015）は親の発達において、子育てを経験することによって、実親が自分を育てた時の気持ちや体験を、想像したり、理解するようになり、感謝の気持ちをもつことができ、実親への感謝の過程を経ることを明らかにしており、中学生であっても、沐浴の大変さや難しさを経験することが、親への感謝の気持ちに変化し、親準備性にもつながっていくことが考えられた。また、「医療職への関心が高まった」と職業選択への意識も変化し、将来への見通しにもつながっていた。

4. 4 将来の職業への意識や変化

文部科学省「中学校キャリア教育の手引」（文部科学省中央教育審議会,2011）によると、中学校段階は、自我の目覚めや独立の欲求が高まるとともに、人間関係も広がり、社会の一員として自分の役割や責任の自覚が芽生えてくる時期である。また、他者とかかわり、様々な葛藤や経験の中で、自らの人生や生き方への関心が高まり、自分の生き方を模索し、夢や理想を持つ時期である。一方で、高校入学者選抜を始めとする現実的な進路選択を迫られ、自分の意思と責任で決定しなければならない時期でもあり、キャリア教育実践にとって極めて重要であると述べている。

本研究の中学生は看護学部での体験授業を希望している生徒であり、看護師への志望については、受講前の将来看護師に「なりたいと思う」「少しなりたいと思う」の人数は9名（60.0%）であったが、受講後には12名（80.0%）となったことから、沐浴の体験をすることが、将来の職業選択を意識する上で重要な経験となり得ることも考えられた。さらに、自由記述からも「医療職への関心が高まった」というサブカテゴリーも抽出され、体験が将来へのイメージや意識につながることも示唆された。助産師が実践するいのちの教育（生命の誕生に関する講義及び赤ちゃんとの触れ合い体験）からの児童生徒の学びからも、「自分の将来は自分で決める」「自分の将来を考えることは大事」などの【自分の将来を考える】や「大人になったら、自分が新しい命を守っていく」等の【大人になった自分をイメージする】というカテゴリーが抽出されており、本研究と同様に、育児の体験をすることにより、イメージが湧き、将来を現実的に見据えることで、自己決定につながることを考えられた。文部科学省「中学校キャリア教育の手引」（文部科

学省,2011)でも、中学生が、自分を見つめ直し、自分と社会との関わり合いを考え、将来における多様な生き方や進路選択の可能性を理解し、自らの意思と責任において自己の生き方や進路選択ができるような能力、言い換えれば、まさしく社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力を育むことはたいへんに重要である、と明記されている。本研究からも、中学生という発達段階において、職業に関連する沐浴体験を行うことで、赤ちゃんに対する肯定的な感情が生じたことが明らかとなり、将来の職業への意識や変化、中学生のキャリア教育に何らかの影響をもたらす可能性があることが考えられた。

5. おわりに

中学生を対象に体験授業を行った結果、対児感情が肯定的に変化し、将来の職業への意識や変化がみられた。本研究は対象が15名と少ないため、結果を一般化することは難しいが、中学生を対象とし、沐浴の体験授業を行うことは、日頃、赤ちゃんとの接触体験が少ない世代にとっては貴重な機会を提供できた。さらに体験前後のデータを量的・質的な手法から内容を丁寧かつ忠実に分析したことには一定の意義があると考えられる。

今後は、看護学部として提供可能な中学生に対するキャリア支援への寄与や、親準備性への影響も鑑み、広く子育て支援の一環として、地域の中学生を対象にこのような機会を増やし取り組んでいきたい。

6. 謝辞

本調査に快くご協力頂いた調査対象者の皆様、支援を頂きました教員の皆様に心より感謝申し上げます。

尚、本研究には、利益相反はない。

【引用文献】

- 天笠茂、2017、“第2章各教科第8節技術・家庭”、改訂学習指導要領×中央教育審議会答申 中学校編、第一法規、175-191頁。
- Creswell.J.W.&Plano Clark.V.L、大谷順子(訳)、2010、“混合研究方法を用いた調査研究デザインを選択する”、人間科学のための混合研究方法 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン、北大路書房、69頁。
- 花沢成一、1992、母性心理学、医学書院。
- 花沢成一、横田正夫、大屋敦、林マツノ、1993、“望まぬ妊娠と対児感情との関係ー妊娠モチベーション測定を試みー”、平成5年厚生省心身障害研究親子の心の諸問題に関する研究、53-57頁。
- 堀弘道、松井豊、2001、“心の健康をはかる〈適応・臨床〉 適応とライフイベント”、心理測定尺度集Ⅲ、サイエンス社、114頁。
- 伊藤葉子、2003、“中・高校生の親性準備性の発達”、日本家政学会誌、第54巻、第10号、801-812頁。
- 厚生労働省看護職員需給分科会、2019、“医療従事者の需給に関する検討会中間とりまとめ”、<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000567572.pdf> (2022-9-28、2023-9-23アクセス)
- 松井弘美、工藤里香、村田美代子、小林絵里子、岡田麻代、2021、“助産師が実践するいのちの教育からの児童生徒の学び”、日本助産学会誌、第35巻、第2号、196-208頁。
- 文部科学省中央教育審議会、2011、“今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)”、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1315467.htm。(2022-9-8、2023-9-23アクセス)
- 文部科学省初等中等教育局、2017、“中学校学習指導要領(平成29年告示)解説技術・家庭編”、https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_009.pdf (2022-9-28アクセス)
- 小笠原百恵、高田昌代、2021、“中学生男子の親になる準備性”、思春期学、第39巻、第3号、296-306頁。

佐々木綾子、末原紀美代、町瀬美智子、2009、“青年期男女の親性を育てる乳幼児との継続接触体験の内容分析による評価(第1報)”, 思春期学、第27巻、第3号、270-282頁。

佐藤美香、長沼貴美、2019、“子どもの接触体験と学習効果”, The Journal of Learner-Centered Higher Education、第8巻、125-133頁。

平栄子、2007、“性教育と組み合わせた中学生の育児疑似体験の効果”, 日本看護学会論文集地域看護、第38巻、173-175頁。

八幡朝子、島谷まき子、2015、“育児関与による父親の発達 アイデンティティ変容過程に着目して”, 昭和女子大学生生活心理研究所紀要、第17巻、27-36頁。

(受付日：2023年10月9日、
受理日：2024年1月29日)

中日教育研究学会『アジア教育文化ジャーナル』

発行日：2024年3月16日

発行者：中日教育研究学会

編集：中日教育研究学会電子ジャーナル委員会

Journal of Asian Education and Culture

No. 6 March 2024

ARTICLE

YOSHIE SAKUMA

Awareness of Childcare Workers Regarding the Criteria for Holding Infants 1

RESEARCH NOTE

TAKAMI NAGANUMA, KEIKO HOUTA, FUMIKO NIMURA, YUKA KATAOKA,

KEIKO HAMAGUCHI, ASAKO NAKAMITSU, MIKA SATOU

Changes in Junior High School Students' Feelings toward Children and Their Consciousness
toward Future Careers through Participating in a Hands-on Bathing Experience Classes · 21